- イネイト・インテリジェンス -

ダニエル・デヴィッド・パーマーの『イネイト・インテリジェンスの進展』を訳してみました。

いうまでもなく、ダニエル・デヴィッド・パーマーは、カイロプラクティックの創設者ですが意外に彼の文献は、翻訳されていないようです。僕も、実際に本を手にとることができませんので、Wikipedia を見てそのページを意訳してみたわけです。

デヴィッドは、ダビデ、彼はユダヤ系のアメリカ人です。おそらく彼は、ラングドック地方に発祥した、 ユダヤ神秘主義カッバーラの信奉者であったと思われます。

神秘主義の系譜としては遠くプラトンにまで遡りますが、ギリシャ哲学まで昇華したとはいえ神秘主義的側面は確実に痕跡があるのです。

アリストテレス、そして、新プラトン主義ともいえる、プロティノス、十字架のヨハネを経て、カルメル修道会に至る、西欧神秘主義の領野は限りなく広いです。

翻って東洋はどうか、真言密教がその代表と言えるかと思われますが、老荘しかり、易、ヴェーダーンタ、などここにも、観照的生、ギリシャでいわゆる、ヴィータコンテンプラヴィータ、への道が、向上道、向外道として示されております。

『イネイト・インテリジェンスの進展』 —

ダニエル・デヴィッド・パーマー(Daniel David Palmer 1845-1913)いうところの、 ユニバーサル・インテリジェンス (Universal Intelligence)は、直訳すれば、「宇宙的意識」。

「宇宙的意識」ないし「宇宙的覚体」などというと古くさくそして大袈裟、そんな無限大の超個的意識が実際にある・・など信じられないかもしれないけれど、その場合、ユング心理学の語る集団的無意識 (Collective Unconscious)という意識の「超個」性を考えれば理解しやすいであろう。 (井筒俊彦「意識の形而上学」ー『大乗起信論 』の哲学 第二部 存在論から意識論へ p60)

「カール・ユング(Carl Jung 1875-1961(川島付記))」は、彼のいわゆる「集団的無意識」がもともと、「元型」的に規定された基礎構造を持つものである。

(die archetypisch bestimmte Grundstruktur des kollektiven Unbewu β ten)と言っている。

「元型」はそれ自体ではなんらの具体形をもたず、未決定、未限定で不可視、不可触。「集団的無意識」または「文化的無意識」の深みにひそむ、一定の方向性をもった深層意識的潜在エネルギー (ein gevichtetes pychoenergetisches Potential)である。

それ自体では不可視なこの本源的エネルギーは、しかし、強力に創造的に働いて、人間の深層意識中間に、「元型」イマージュとなって不断に自己を顕わしてくる。つまり、「元型」は「魂の構造規制素」 (dic strukturdominanten der seele)なのであって、この無形、無相の内的実在の基本的方向性が、形象化して現れたものが「元型」イマージュである。とユングはいうのだ。(井筒俊彦「意識と本質」p171-172)

『イネイト・インテリジェンスの進展』 2 一

「集団的無意識」とは、要するに、集団的アラヤ識の深層における無数の言語的分節単位の、無数の意味カルマの堆積の超個的聯合体系である。このユング的集団無意識に見られるように、超個人的共同意識、または共時的意識を想定して、それの主体を汎時空的規模に拡大し、全人類にまで拡げて考えてみるのだ。(井筒俊彦「意識の形而上学」p60)

ところで、超個的、全一的、全包括的、な意識フィールドの拡がりを「元型」という視点からとらえた場合、 洋の東西を問わずさまざまな思想に共通したものがある。以下再び、井筒俊彦「意識と本質」より引用する。

「我々が常識的に現実とか世界とか呼んでいるものは、表層意識の見る世界であって、それが世界の唯一の現れ 方ではない。

「元型」イマージュは、集団的アラヤ識の堆積、-それを言語アラヤ識と呼ぶ-、の領域に発生する。 (ちなみに アラヤ識とはサンスクリット語にいわゆる貯蔵庫の意。川島補註釈)我々の内部で、言語アラヤ識は 絶えず種々様々なイマージュを生み出している。このようなイマージュ空間は、意識体験上の事実として実在 することはユングの証言を俟つまでもなく、誰の目にも明らかである。

いずれにしても、「元型」イマージュの生起に関する深層意識的事態を受け止める人たちの言語観はきわめて 特異なことは確かである。

そしてそれをそのまま理論的に展開すれば、それは大規模な言語哲学を生む可能性をもっている。 深層意識的言語哲学だ。

空海の阿字真言、イスラームの文字神秘主義、同じくカッバーラー文字神秘主義など、典型的なケースは 少なくない。

『イネイト・インテリジェンスの進展』3 一

西洋では、この種の言語哲学、あるいはそれの基く言語観、を「文字象徴論(=文字神秘主義) (la symbolique des Lettres)と呼ぶのが一番普通だが、アメリカの ユング派心理学者ヒルマンは、「コトバの新しい天使学」(a new angelology of words)とする。

およそコトバなるものは、「天使的側面」があるということ、つまりすべての語は、それぞれ普通一般の意味のほかに、異次元的イマージュを喚起するような特異な意味側面がある、ということだ。

コトバの意味作用のこと「天使的側面」に焦点を絞りつつ、それを言語理論として、あるいは言語哲学として、 展開させる思想家たちが、東洋にはある。それを深層意識的言語観、深層意識的言語哲学と呼ぶ。

東洋哲学一般の一大特徴は、認識主体としての意識を表層意識だけの一重構造としないで、深層に向かって 幾重にも延びる多層構造とし、深層意識のそれらの諸層を体験的に拓きながら、段階ごとに移り変わっていく 存在風景を追っていくというところにある。

だから、東洋哲学においては、認識とは「意識と存在との複雑で多層的なからみ合い」である。 (「意識と本質」p184-188)

『イネイト・インテリジェンスの進展』 4 -まとめ - 一

科学技術に基づく西洋医学のパラダイムは、現在実際上において、人類に対する医学の共通パラダイムとなり、その基礎の上に、グローバル化への方向を目指し流れている。 明治以来、欧化の道を進みつづけてきた日本人にとって、もはやあとに引けないほど西洋化している事実がある。それもほとんどそれと自覚することなしに。古来、日本人は歴史的に、いつも「和魂漢才」、東西の文化を感受し融合させてきた。ここで、私は、東洋と西洋の医学を論じるつもりはない。もとより、一介の整体師であるにすぎないのだから。

だが、現代に生きる日本人が、東と西との科学、文化の交わりをもとめ、両者の関わりを考えるとき、 東洋の哲学を主題とし、基礎として考究しなければ、と考えるものである。

東西思想の出あいが実存的体験の場で生起し、一人でも多くの人が幸せに過ごすことができれば、 これほど幸甚なことはない。

『イネイト・インテリジェンスの進展』 おわり